

に水の噴出や空洞によって何回もの崩落を引き起こしていた。

現在、水位が高いことを利用して、アニエネ川の水を導水して落差約百メートルもの人工の滝が設置されている。

しかし、石灰分が析出するというアニエネ川の水質は、後世、噴水に重大な課題をもたらすことになる。

3. エステ家の別荘

丘を上ったところにあるバスターミナルとなっている広場の北に小さな広場があり、そこを抜けると別荘の入り口に到着する。入り口は教会の脇にある小さい質素なもので、中は広いが宮殿の入り口とは思えず、誰かに聞かないと分からない。庭園は宮殿の北に広がっている。

このエステ家の別荘 (Villa d'Este) は枢機卿であったイッポーリト 2 世 Ippolito (1509-72) がつくった、前例のない規模の噴水やカスケード (滝流れ) を持つ庭園である。1560 年頃から形ができあがりだした。枢機卿はカトリック教会における教皇 (法王ともいう) の最高顧問集団で、重要な案件について教皇を直接に補佐する「枢機卿団」を構成すると同時に、個々の枢機卿は、教会全体にかかわる日常的な職務について教皇を助ける。枢機卿は、原則として司教の位を登った聖職者の中から教皇が自由に任命する。また、教皇選出選挙 (コンクラーヴェ) の選挙権は、枢機卿だけが持つ。

別荘という言葉からすると本拠地が別にあったように思える。エステ家は本拠地フェラーラのほかにいくつかの別荘を持っていた。大規模な本宅があったのかどうかは不明である。

4. イッポーリト 2 世

1509 年 8 月フェラーラで誕生。フェラーラ領主の次男で母親は教皇であったアレクサンデル VII 世の娘という名家。9 才でミラノ大司教座などを叔父のイッポーリト 1 世から譲り受けた。フランスと関係が深く、親戚であったフランソワ 1 世とアンリ 2 世の相談役で、助言していた。リヨンの大司教になったりして、非常に裕福であった。行政手腕は群を抜いていたと言われる。当時の高位の聖職である大司教職などは、世襲であったらしく、行政権を持ち国王と変わらない存在であったようである。

1550 年の法王選挙コンクラーベで、フランス王アンリ 2 世擁立の候補者となり、機敏なネゴや買収によって支援者を増やした。このコンクラーベは 3 宗派にわ

かれた激しいもので 10 週間にも及んだ。途中で立候補をやめてユリウス三世の応援に切り替え、その見返りはテイヴォリの知事となって帰ってきた。

この役職は、古代遺産の熱烈な収集家であったイッポーリトにとってありがたいものであった。イッポーリトは芸術が大好きで、多数の様々な芸術家を気前よく支援した。その中に建築家のピーロ・リゴリオ Pirro Ligorio がいた。

当時、古代の資産はまだ調査が進んでいなかった。ピーロ・リゴリオは正式な考古学者として研究や探索をはじめ、建築のレリーフ探索のための発掘、測量、いろいろな建物の記述、地形的、形態学的分析なども行った。膨大な仕事は大著として残され、これが別荘建設の背景となった。



海の劇場

ハドリアヌス帝の別荘のなかにある建物の一つで、円形

イッポーリトに壮大で革新的で、建設中の法王宮殿より素晴らしい噴水庭をつくる提言をしている。

5. 別荘の建設

テイヴォリ知事の館は女子修道院の北東にあったが、イッポーリトの住居としては適切でなかった。しかし、眺望の良さは宮殿としてふさわしいものであ



ローマ方向の眺め

城館脇の通路から。下右にロメッタの噴水

た。

枢機卿の望みで政府宿舍や付属する建物の改造が直ちに必要であったが、すぐにハドリアヌス帝別荘に劣らないような宮殿を作る方向に変わった。

別荘庭園の候補地は傾斜地で、予定敷地内の建物はまばらであった。傾斜地は落差を利用できるので噴水の設置に好都合であった。1550年の秋から用地の買収が始められた。

その後一時仕事でティヴォリを離れていたが1555年に多額のお金がかかる別荘の大改造に戻ってきた。

しかしその年に教皇Paulo IV世（在位1555-1559）によって聖職売買の罪で追放されてしまったのである。生まれたフェラーラに戻っていたらしい。その後教皇Pio IV世（在位1559-1566）になって復活し、知事に戻ることができ、1560年が別荘建設の最初の年となった。まだ大半の土地は未買収であり、用地の確保が進められ、既存の建物の撤去が1569年まで続いた。

庭園建設のため既存の中世の雰囲気は失われ、公共的な建築やまた史跡も犠牲となった。更地化が終わり、大量の土砂移動による造成の段階となった。切り出された土砂は低地に運ばれ、また柱とアーチ構造による人工地盤もつくられた。

工事は1563年から1565年の3年にわたって庭園の至る所で平行して行われた。

その間に水路システムの工事も進んだ。1564-65年に卵形噴水近くに造成された山までの200mの地下水路と園内の水路が整備された。

その頃庭園もその形が見え始めていた。園路によって方形のおおむね30mの区画が形成され、これはルネッサンスの芸術規範に合うものであった。

1565-66年頃に第一段階の建設が収束し、宮殿の装飾に重点が移っていった。

1566年にイッポリトは5回目のコンクラーベで敗退し、教皇Pio V世の支持を失って役職がなくなったが、かえって宮殿建設に打ち込めるようになって、建設のペースは格段に上がった。

1569年以降建設はスローダウンした。これは枢機卿の財政状況が悪化したためで、1568年にはフランスからの収入を失っている。すでに別荘建設に莫大なお金が費やされていた。

この頃イッポリトは痛風に苦しみ精神的な思索、読書や奥深い会話に安らぎを求めるようになっていた。ただ、エステ家の別荘は、文化の聖堂となり、知的エリート、詩人、音楽家などの集まる場所となっていた。

1572年教皇Gregory VIII世が訪問するところとなり、

噴水や建物の装飾など拍車がかかったが、たいそうな出費となり、借入金は一層ふくれあがった。

法王の来訪は高名な枢機卿に敬意を払うもので、イッポリトの政治的な復活がはじまるように思えた。しかしこの年イッポリトは工事中の庭園を残してローマで亡くなってしまった。遺体は故人の遺志により別荘の脇に埋葬された。イッポリトが死去した時、残念ながら多くの噴水は未完成ないし未着手であった。

別荘の建設は甥のルイジLuigi枢機卿（1538-1586）に引き継がれた。ルイジは施設建設の継続を最小限にし、お金がかかる維持費などにそれほど力を入れなかった。しかし当時、別荘の名声は広がり、聖職者、貴族、大使など引きも切らず訪れていた。

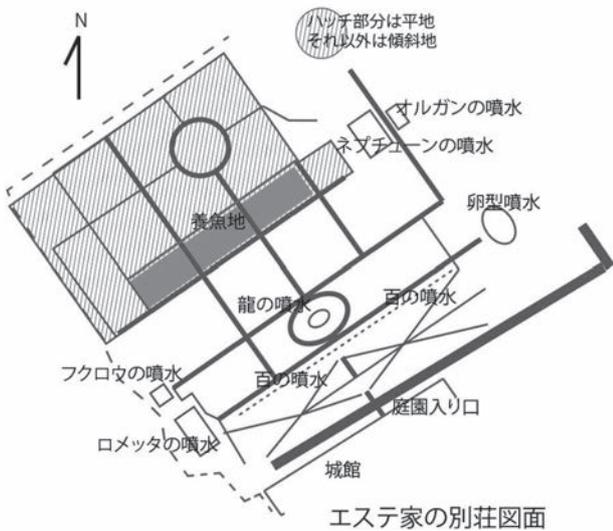
1599年にエステ家のアレッサンドロ・デステAlessandro d'este（1568-1624）が枢機卿に選ばれ、1605年にティヴォリの知事となり、別荘の整備をおおがかりに復活することになる。既存施設の修復だけでなく噴水建設や低地の庭園整備を行い、1621年に教皇Gregorio XV世から別荘をエステ家の所属にする承諾を得た。その後代々の後継者の努力が続いたが、1695年頃からエステ家の財力が尽き、以後2世紀にわたり傷んでいき、絵画、家具や古代の彫刻は売られていった。

1850年から1896年の間、グスタフ・フォン・ホーヘンローエ枢機卿が別荘を購入し、修復の仕事を始めた。こわれて、枯れた噴水を復活させ、茂りすぎた樹木の整理をはじめた。エステ家の別荘は再び国際的な文化の中心として多くの芸術家、文学者が訪れる場所となった。また、一次大戦後は政府の管理となった。

6. 庭園の配置

配置は宮殿から降りていく中央の軸線を基準に左右対称にされている。中央軸線に平行して左右に2本ずつの通路が等間隔に並んでいる。もともと傾斜地であったため、宮殿側（南東側）と東北側は傾斜地になり、宮殿から見て手前と右奥の通路は地形上から高い所を通っている。横軸線は養魚地を中央にして左右に同じく2本ずつ通路があり、縦横の通路によって方形の区画が多数設けられている。このように通路は幾何学的な配置で、中心となる養魚地を取り囲む低段地域は平面であるが、南東と北西での傾斜地が多く、また現在では樹木が大きく育ち、噴水がシンメトリーに配置されていないので、幾何学的な感じは薄れている。

城館からの出入り口は2階建てになっていて、下から出たり2階から建物横の階段を降りたりできる。城館からすぐに庭園に沿って伸びる広い園路があり、階段を降りないで庭園の全景を見たり、園遊会をしたり、



エステ家の別荘図面

端に行ってみ晴らしのよいローマ方向を眺めることができるようになっている。

7. 用水路

庭園では高低差を利用して、上の噴水の水が下流の噴水に繰り返し使われる設計であった。アニエネ川からはローマ時代から街中を流れる用水トンネルがあった。エステ家別荘のために1560年頃に水路がつくられ、園内で3本に分かれて水を供給していた。この水量は最大5リットル/秒程度のものであった。1564年頃に500リットル/秒もの水量を流せる水路ができあがった。庭内では噴水に何回も使えるよう複雑な水路網が整備された。

アニエネ川の石灰分、シルトが水路や噴水施設に悪影響を与えているため、1999年に地方政府によって浄水施設と紫外線消毒装置が設置され、改善されている。

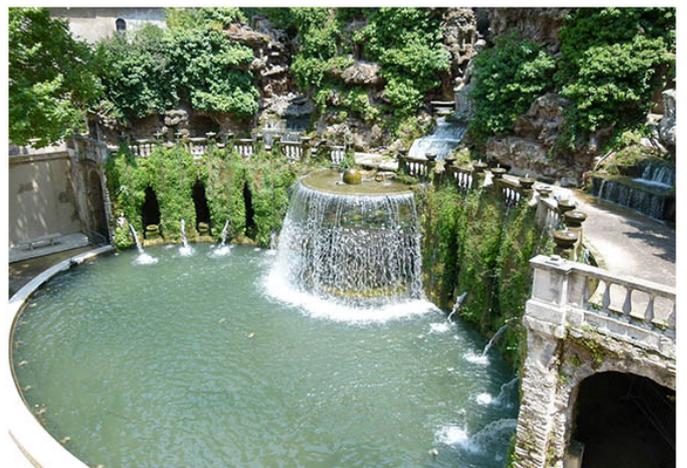


園内の水路
水流を効率的に利用するため、所々に見られる

8. 卵形噴水（楕円噴水）

導水路の流入口近くにあるこの噴水は当時イタリア内外で最も素晴らしいものであった。アニエネ川から導水された水が最初に姿を現す場所で、庭園内で最初につくられた噴水である。ピーロ・リゴーリオによって設計された。大きな楕円形の池を半円形の回廊が囲み、壁のアーチ柱部分に設置された10体の妖精像から噴水が池に回廊の中に注いでいる。これらの像や壁の彫刻はいまや完全に植物によって覆われてしまった。回廊の各アーチの下には扇形の噴水があるが、取材した時噴水は出ていなかった。

回廊にはグロット（洞窟grotto）がある。グロットには中に噴水があって、夏涼んだり談笑したりする場所を提供するためのものでこの庭園で多用されている。ヴェルサイユでも初期の庭園に見られた。



卵形噴水
像で飾られた回廊がすっかり緑に覆われている。

回廊の上は歩廊になって、池側の手すりの上には噴水付きの鉢が並びそこから水が池に落ちている。回廊の向こうの人工の小山は岩の割れ目から水が流れ出すようになっていて、斜面には3体の大きな像があり、各々の像の下からカスケードが流れ出しその流れは集まって回廊中央の半円形のせり出しから滝となって池に落ちている。このうち中央の像はSybilla Albunesaという物語の主人公とその息子。その両側にエルクラレオ川とアニエネ川をあらわす像がある。現在、回廊は安全上立ち入り禁止に。

9. 百の噴水

卵形噴水広場を出たところの通路斜面に庭園いっぱい、長さ百mにわたってずらっと並んでいる。3列の水路によって水が供給され、上の段は扇形と線状の噴



百の噴水

ロメッタ噴水側から。向こうに卵形噴水とその上の像が見える

水が交互に噴き出ている。かつては22のボートと72のボウルが飾られ、噴水の前にエステ家の象徴である鷹の彫刻が並んでいたとされるが、鷹しか見えなかった。上の噴水の水が水路に戻ってまた中段で吹き出し、再度下段の水路から最下段の噴水になる。最下段の擬態化した顔の口から流れ出す噴水の数をざっと数えたら百あったので、中段、上段を入れるとすごい数になる。中段噴水の壁には鳥や魚、海獣の飾りが並んでいたが完全に緑に覆われている。

噴水を百個もずらっと並べるという設計の意図は相当強かったようで、それが城館から降りる主たる軸線との交点で表れている。普通主たる園路と交差する場合はその区間だけ通路として空けるがここでは、噴水列が主たる軸線園路を遮断している。このため、100m以上にわたって、上から降りる所がない。養魚地などへ行くためには両端の楕円噴水かロメッタ噴水近くの通路を通るしかない。長い列の噴水を均等に上げるのは難しかったろうし、他に長さを競うものがなかったと思われるが、これだけ固執したのは何故だろうか。建設は1566年にはじまり1571年頃までかかった。

現在、鷹の像と最下段の擬態化した顔の噴水口を除き、すっかりしだのような植物と堆積物によって覆われてしまい、往時の姿は想像するしかない。

10. ロメッタ（小ローマ）の噴水

百の噴水を挟んで卵形噴水に対峙している。1570年頃、古代ローマを表すものとしてつくられた。言い伝えではイッポリトは壮大な宮殿をローマ市内に建てたかったが教皇Pio V世に反対され、ここにミニのローマをつくったとされる。ローマの街を模していて、ローマ勝利の女神、双子を育てる狼の像がある。またローマ市街を流れるテヴェレ川を模した水が流れてい



ロメッタの噴水

上に勝利の女神とオオカミ像

る水路にオベリスクを帆柱にした船を置いている。

スペイン広場にある同じく船の形をしたバルカッチャ噴水は1629年につくられている。

11. オルガンの噴水

凱旋門のような構造の中に小さな建物が取りまわり、そのなかに水力オルガンが設置されている。加圧室に水と空気が送られそこで分離されて空気はパイプに送る風となり、水は水車を動かしてこれがパイプの弁の開閉を制御する。演奏時間になると小さな戸が開いて、演奏しているオルガンを見ることはできるが、機械の動きは見えない。ずっと動いていなかったが長期間の修復作業を経て17世紀の頃の原理を踏襲した仕掛けで2003年に復活した。



オルガンの噴水

演奏時間になると小さな扉が開いてオルガンが演奏され、それを見ることができる。

12. ネプチューンの噴水

1661年にオルガンの噴水の下にカスケードだけの噴水がつくられたが、その後毀損していた。1927年になっ



ネプチューンの噴水
滝のあちこちから噴水を見ることができる



グロットの中

噴水をおいて涼む場所に。ここでは扇形の噴水で、大規模な噴水が加えられて、素晴らしい景観となった。

噴水は5段で構成され、最上段は斜面に沿って落ちる落差の大きな滝で、背後が園路になっていて、そこから滝を見ることができる。また園路にはグロットがつながっている。第2段は幅広い滝と左右6列で中央ほど高い直線的な噴水、第3段は上の滝の2段目となる滝で、滝に半隠れするニッチ（西洋建築で、壁面を半円または方形にくぼめた部分。彫刻などを飾ったり噴水を設けたりする。壁龕（へきがん））があり、そこにはネプチューンの像が置かれる予定になっていたが未完成に終わっている。第4段は左右に並ぶ半円形の水盤の全周から滝が落ち、高揚程の噴水が多量の水を噴き上げ、最下段は幅広い滝の2段目となっている。噴水をあちこちから見るように、展望スペースも設けられている。

13. 龍の噴水

宮殿の真下、主たる園路にある、典型的な噴水であ

る。かつては噴出する際の圧力変化で生ずるすさまじい音を出していたとされるが、このしかけは消失してしまった。中央に龍の像が4体、脇にイルカの像が配置されている。

噴水を囲む曲線階段の手すり上部に水が流れている。手すりの噴水側にはノズル付きの花瓶が並んでいて、噴水池に届く細い噴水をあげるノズルがついている。残念ながら訪問した時こちらは上がっていなかった。

背面の壁にはニッチが配置され、当初は龍を退治したヘラクレスの像が入る予定であったが、後にジュピターになった。



龍の噴水
主の庭園軸線にある。上の方に城館の2階出口。

14. フクロウの噴水

凱旋門のようなつくりの建物のニッチに1565年頃、水力のしかけがつくられた。このしかけは古代アレクサンドリアにあったとされる。青銅のオリーブの木にとまった20羽ほどの小鳥がさまざまな声でさえずり、フクロウが姿を見せると静かになるというもの。長ら



フクロウの噴水



百の噴水2

エステ家の象徴であるタカの彫刻と扇形噴水

く壊れたままになっていたが最近修復された。案内パンフレットに書いてあった演奏時間に合わせて見に行っていたが、動いていなかった。掲示もないのでわからないが、故障修理中のものであった。

15. 終わりに

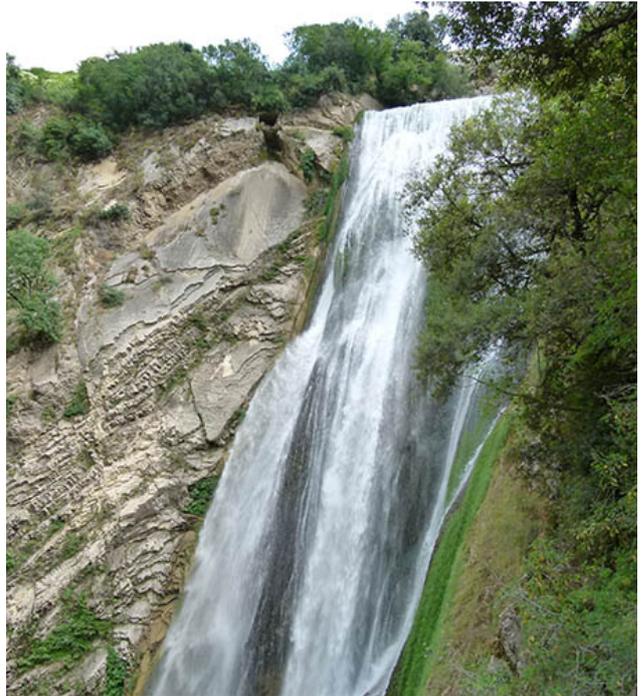
エステ家の噴水は16世紀に突如現れたように見える多数かつ大量の水を流す噴水を持つ庭園で、今回紹介したのはハイライトの部分であるが、これらの他に多数の噴水がある。問題は堆積物と植物によって覆われてしまい、多くの噴水が水が流れ出る植物の塊のようなことになってよくわからなくなっていることである。

アニエネ川の石灰分によって川が長年月の間にダムアップされて、その高落差を利用して大規模な噴水ができたのであるから、ヴェルサイユ宮殿庭園で噴水のための水確保に莫大なお金がかかってしかも成功しなかったことを考えるとありがたいことではあるが。

エステ家の別荘が後世に残る傑作になったのは、芸術を愛し、莫大な資産を持っていたイッポーリト2世と、ハドリアヌス帝別荘など詳細に調べて、大規模な噴水を持つ庭園を提案したピーロ・リゴーリオとの結びつきによるものである。パリ近郊にかつてない構想と規模のヴォー・ル・ヴィコント庭園を作り上げた、財務長官ニコラ・フーケと造園家アンドレ・ル・ノートルを連想する。

多くの噴水が工事中ないし未着手の時に亡くなったイッポーリト2世とほぼ完成した直後に逮捕投獄されて、二度と傑作を見ることができなかったニコラ・フーケと無念さが残るだろうことも似ている。

多くの噴水のテーマがギリシャ神話に由来している、これがヴェルサイユ庭園につながっているのだら



人工の滝

テイヴォリ市街の外れに、19世紀に教皇グレゴリーXVI世が設立したグレゴリアーナ別荘公園にあり、落差百メートル。当時大洪水があり、対策としてバイパスで人工の滝に流れを分岐する案が選ばれた。



養魚池

ネプチューンの噴水から。左上に城館、その下に籠の噴水

うか。城館にはキリスト教に関わる絵もあるが、カソリックの枢機卿の館として不思議な感じもする。

将来、シダなどの植物や堆積物が取り除かれ、往時の姿を見学できるようになることが期待される。

参考

1. エステ家のヴィッラ ISBN88-8016-677-8
2. Guide to Villa d'Este Isabella Barisi ISBN978-88-8016-613-9